
逢魔奇譚 ヒメ始め

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔奇譚 ヒメ始め

【Zコード】

Z2492G

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

* 注意本作品はタイトルでご想像されたであろう、内容は一切含まれておりません。別に何も想像しなかつた方は普通にお読み下さい。この作品は人中鬼門録の続編となつております。そのため、正体不明の渡り巫女が活躍?するかもしれない内容となつております。以上の点に注意し、療法療養を守つて正しく使い下さい。なにかあつた場合は私に……まあ、責任は取れませんことをご了承下さい。
遊び過ぎ?

さて、『来場の皆様。『ヒメ始め』といふのを『じ』存知でやしちゃうか。はい、そこのお客さん。なに顔を真っ赤にして、何考えてやすの。……まあ、間違いでは『じ』ざいやせんが。

はい？ なら突つ込むな。お客様、それはお約束といふ物でございやしちゃう。

さて、一口に『ヒメ始め』と申しやしても、実はいろいろな『ヒメ始め』がございやす。新年が明けて初めて火や水を使う日を火と水を並べて『火水始め』と言いやす。

それから、裁縫は昔から女の技量と言いやしてね。年が明けて、女の技量を始めて出す日でやすが、新年を明けて始めて衣服を縫う日でやすね。その日を女の技わざと書いて『女技始め』とも言いやす。そしてもちろん、先程皆々様がご想像されたとおり、男と女の秘め事。いわゆる夜の秘め事でやんすね。これも『秘め始め』と言いやす。ちなみにでやすね、このヒメは姫様の姫とは書かずに、秘め事の始めと書いて『秘め始め』と読みやす。

さて、これから話しやす『ヒメ始め』は隠語でやしてね。まあ、皆々様のような世間一般の方が使わない『ヒメ始め』で『じぞい』やす。

場所は田舎の農村でやす。至つて普通の村でやんしてね。その村には仲睦まじい夫婦がいやした。

その夫婦、地主の娘夫婦でございやしてね。それは村中で評判になるほど仲睦まじく、夫も妻も良く働いた事で村中から信頼されている夫婦でやした。

その夫婦は夫を藤作とうさく、妻はお琴と言いやす。

ですが、年も暮れにちかづた頃。藤作が悪夢にうなされてるようになりやしてね。それはそれはお琴も心配して、父である地主殿に

相談に行つたほどでやしたから、相当藤作の症状は酷かつたんでやしちゃうね。

なにしろ悪夢を見るよつになつてからは藤作がどんどんとやつれて行きやしてね。数ヶ月のうちに別人のようになつたのでやすから、心配するなといつのが無理なのである。

そんな藤作でやすが、悪夢の内容をお琴にまつたく話そつとしゃせんでした。当然のようにお琴も地主殿も詰め寄りやすが、藤作はそれだけは口が裂けても言えないよつでやんして、地主殿もお琴も困り果ててしまいやした。

そして年の瀬が更に近づいた頃。藤作の悪夢はまったく治る気配が無く、お琴は胸を痛める日々を送つてやした。ですが突然、地主殿がお琴だけ呼び出して家に招きやした。

久しぶりの実家でやすが、藤作の事が心配なお琴の顔は暗いままでやしてね。そんなお琴に父は朗報を告げやした。

「喜べお琴、藤吉を治す手段が見つかつたぞ」

「えつ、それは本当ですか？」

「ああ、年が明けたら来る手筈になつてゐる。なんでも靈験あらたかな渡り巫女だそうだ」

地主殿の言葉はお琴に生氣を吹き込んだかのようではやした。話を聞いたお琴は家に飛んで帰りやしてね、すぐに藤作にその話をしたんでやすが、藤作はその話を聞くと烈火の如く、怒り出してしゃいやした。

「お琴！ 余計なことはするんじゃない！」

「余計な事つて、あんたは毎晩うなされてるじゃない。絶対に何かの憑き物が取り付いてるのよ！」

毎晩のようにうなされる藤作を見つてお琴は何かが藤作に憑いていると思つたのでやしちゃう。だから憑き物と決め付けたようではやす。

憑き物といつのは幽靈やら妖怪やらが憑く事を言いやしてね。この憑き物が出来やすと悪い事が起き続けると言われてやす。だからお琴も藤作に憑き物が出来たと思つたのでやしちゃう。

だがそんなお琴の言葉に藤作は更に怒りやした。

「そんな事は無い！　ただ寝付きが悪いだけだ！」

「それだけで毎晩もうなされたりしないわよ！」「…」

という感じで夫婦喧嘩になってしまいやした。

結局、夫婦喧嘩は三日も続きやしてね。お琴は実家に泣きながら帰り、事情を説明しやした。そこで地主殿が出て行きやして藤作を説得に取り掛かりやした。

地主殿の申し出とあれば藤作も嫌とは言い切れ無かつたのでやしょう。話はまとまりやして藤作は素直にお祓いを受ける事になりやした。

そして年が明けやして四日が過ぎた頃でやす。夫婦の家に来客がありやした。

年が明けて皆が浮かれている事でやすから、お琴も親類の誰かやと思ったのでやすが、それは待ち焦がれた来客でやした。

戸を開けたお琴は来客に見とれてしやすいやす。その来客は女の目から見ても美しかったのやしき。

巫女装束に長く美しい髪をした、天女のよつな渡り巫女でござるやす。

「こちらは藤作さんの家で間違いないでしょ？」「

「えつ、あつ、はい、あの、あなたが」

「はい、」依頼を受けた渡り巫女でござります」

三日を過ぎて間もないのに渡り巫女が着てくれた事が嬉しかつたみたいでやして、お琴は喜んで渡り巫女を家に招き入れやした。

「あいにくと主人は出かけてまして、もう少し経てば帰つてくると思うのですが」

「構いません。待たせてもらつて良いでしょ？」「

「は、はい、是非」

あいにくと藤作は地主殿と挨拶回りに出てやして、その時は家に

おりやせんでした。

お琴は巫女にお茶を出してもじもじと落ち着きが無む邪じやでした。お琴としては一刻も早く藤作を楽にしてやりたつかたんでもじょう。巫女に話を切り出そうか迷つてたんでさあ。

そんなお琴に気付いたのようで、巫女からお琴に向かつて話しかけやした。

「それで、旦那様はどうな様子ですか」

巫女から話を切り出したのでお琴は藤作が毎晩のように悪夢にうなされてる事を早口で喋りだします。

「巫女様どうやらあの人は何かしらの付き物が憑いたみたいなんです。毎晩汗をびっしょりと搔いて同じ言葉を繰り返すんです。その所為であの人はずつかり痩せ細つてしまつて見るに耐えません」

一刻でも早く解決したいお琴でやしたが、それとは裏腹に巫女はゆっくりとした口調で話を続けやした。

「憑き物ですか？」

「はい、あの人は何も言つてくれませんが、毎晩同じ悪夢を見るようすで、これは憑き物としか思えません」

必至に訴えてくるお琴を横目に巫女はお茶をすすりやしてね。何とも緊迫感が無い様子でですが、それでもお琴は巫女を信じたのでやしきょう。じつと巫女の言葉を待つてやした。

「先程、同じ言葉を繰り返すと申されましたが、どのような言葉ですか？」

「確か……キヌ、それと知らなかつたんだ、許してくれ……と」

「キヌ、ですか」

キヌと言われやしても巫女もお琴も何のことやら分りません。お琴も何度もその事を藤作に尋ねたか分りません。だが藤作は一向に口を割ろうとはしませんでした。

「あの、巫女様、あの人を助けてもらえるでしょうか？」

お琴にとつて渡り巫女が頼れる唯一の存在でやした。だから藁をも掴む気持ちで巫女に尋ねますが、巫女は飲み終えた湯飲みを戻しました。

やすと真剣な面持ちでお琴と向き合ひやした。

「少し……難しいかもしません」

「やじを何とか！」

お琴は父に頼んでお金を倍以上も用意すると言ひやしたが、巫女は首を横に振りやす。

「そうではないのです。旦那様が毎晩謝つているところには、何かしら後ろめたいことがあるといふことなんですね」

「だからどうしたと言つんですか？」

人間生きていりやあ何かしらの後ろめたいことがありやしじう。藤作にそのような事が在つてもお琴は不思議に思いやせんでした。ですが巫女はそれが悪いと言いやす。

「もし、その人に人に言えない何かがあるのだとしたら、それが原因で悪夢を見ている可能性が大きいのです」

「じゃあ、その人が何も言わない理由は

「たぶん、そこに在るのだと思います」

だから藤作は何を聞かれても答えなかつたのでやしじう。だが原因がそこに在ると分ればそれは言つてられやせん。

お琴はなんとしても藤作に口を割らせようとしやすが、巫女はそれを止めやす。何故止めるのかとお琴が尋ねやすと巫女はこのような事を言いやした。

「人は何かしらの隠し事をすると迷う物です。それを人に打ち明けるかどうか、今後どうやって隠して行こつか。そういう事を新年早々に行つ事を私達はこう言ひます」

巫女の話にお琴は固唾を呑んで聞きやす。そして巫女はゆっくりと口を開いて言葉を出しあした。

「秘迷始め、と」

「ヒメ始め……ですか？」

お琴は巫女の言葉を繰り返しやす。お琴もそんな言葉があるのは知らなかつたのでやしじう。巫女はそんなお琴に秘迷始めを説明してやりやした。

「人間は秘め事が在ると必ず迷います。秘迷始めとはそうした迷いが生まれた時、新年早々そのような迷いを覚えた時に使われます。その人は秘迷始めの真最中なのでしょう」

藤作は秘めている事があるから迷い苦しんでいる、お琴はそう感じやした。だがそこからどうすればいいのかはお琴には分りやせん。お琴は身を乗り出して巫女に尋ねやした。

「巫女様、どうすればあの人は秘迷始めから抜け出せるのでしょうか？」全ての原因は藤作の秘迷始めにありやす。藤作が秘迷始めから抜け出せれば毎晩の悪夢からも抜け出せると思つたのでやしそう。

だが巫女は難しい顔でお琴に言いやした。

「それは、その人がが秘め事を打ち明けるしかありません。ですが、無理に聞き出そうとすれば拒絶するでしょう。ですから、私がその人の秘め事を聞きましょう。赤の他人なら聞かせても構わないと思いますから」

「それであの人は助かるのですね！」

藤作を助ける方法が見つかりお琴は喜びやしたが、巫女はまだ難しい顔をして空になつた湯飲みをお琴に向かつて差し出しやす。どうやらお茶のお代わりを要求していよいよやして、お琴は立ち上がると湯飲みを手にお茶を入れて戻つてきたした。

再び出されたお茶をすすりながら巫女は難しい顔で言いやす。

「それだけでは無理でしょう。旦那様が秘め事の贖罪をしない限りは悪夢を見続けると思います」

巫女の言葉はお琴に影を落としやすが、お琴は気を取り直して影を追い払うと巫女に意氣揚々と話し掛けやす。

「では、あの人があの人が秘め事を打ち明けて謝れば何とかなるのですか？」それが藤作を救う手段だと感じたお琴は巫女に向かつて尋ねやす。巫女もお琴の言葉に首を縦に振りやした。

「はい、それだけしてもらえば後は私が何とかしましょう」

「ああ、ありがとうございます！」

お琴には巫女が菩薩に見えた事で「ございましょう。今まで苦しむ

藤作を見るこことしか出来なかつたのでやすから、これほど嬉しい事はないよつで」*じぞこ*やす。

それからしづらくしやすと藤作が地主殿と一緒に帰つてきたした。お琴は一人を出迎えるなり、先程巫女に教えてもらつた事を口走りやす。

「あんた！ やつとあんたの悪夢を治す方法が分つたよ。秘迷始めだよ、秘迷始め！」

「はあ、おまえは「きなり何を言い出すんだ」

そりやあそつで「ございやしょつ。妻がいきなりヒメ始めなどと言ひ出しては夫は困るといつものであ。

それから地主殿はお琴を落ち着かせやすく、やつと事態を飲み込んだようで、地主殿は巫女がいる部屋へと急ぎやした。

地主殿が部屋の障子を明けやすと果然と立ち戻りしやした。地主殿は年でやすが、男なのは変わりありやせん。だから美しい巫女に見とれてしやいやした。

しばらく巫女に見とれていた地主殿は自分を取り戻しやすと、巫女の前に座りやして頭を下げやす。

「新年早々、こんなところにまで来ていただきありがと「う」*じぞこ*ます」

「いいえ、どこまで役に立てるか分りませんが、私に出来る事は全てやらせていただきます」

「よろしくお願ひします」

地主殿もやつと娘夫婦の問題が片付くと胸を撫で下ろしやした。ですが事はそう簡単に行かなかつたんやすよ。

乱暴な足音を立てながら藤作が部屋に入つてくるなり巫女を睨み付けやした。

「何処の誰だか分らないけど、俺はあんたに世話をなるつもつは無

「あんた！」

いきなり無礼な事を言い出す藤作をお琴は怒鳴りつけてから巫女の様子を伺いやした。気を悪くして帰られては元も子も『ござい』せん。お琴にとつてはせつかく見出した光明でやしたから。

ですが巫女には不快な表情が現れることが無かつたのでやして、お琴は胸を撫で下ろしやすと藤作に向かって更に怒鳴り付けやした。

「あんた！ あんたが秘め事を打ち明けて謝らない限り悪夢は終わらないんだよ！ いつまで経つても苦しみ続けるんだよ。それでも良いつていうのかい！」

「それが余計な事だと言つてるんだ！」

藤作は相当、秘め事を言いたくないみたいでやすな。

まあ、それはそうでございやしそう。誰しも今まで秘密にしてきた事をおいそれと人に打ち明ける事は出来ない物でございやす。それが妻なり夫なりの近い仲なら、尚更言いがたい物になつてしまふもんでやす。

ですが、それで納得するお琴ではございやせんでした。なにしろ夫の症状を間近でいつも見てるのでやすから、どれだけ酷い物かは一番分つておりやす。

夫を救いたい一心で夫の秘密を聞き出す。

なんともまあ、けつた的な事態になつた物ではございやすな。ですが巫女が言うには藤作が秘密を打ち明けなければ悪夢は一向に終わらないでやす。

口を割らせたいお琴と、絶対に喋りたくない藤作。一人の言い争いは夫婦喧嘩へと発展しやして地主殿でも治める事が出来やせんでした。

しかたないと地主殿は巫女を自分の家へと招きやした。このままここに居ても收拾は付かないと思つたのでやしそう。だつたら今日一日、充分過ぎるほど喧嘩をせとけば明日にはゆっくりと話せると思つたようでやす。

未だに夫婦喧嘩をしている藤作とお琴を放つておいて、巫女と地

主殿は一人の家を後にしやした。

「先程はなんともお恥ずかしいところを見せしてしました」
客室に巫女を案内した地主殿は落ち着くなり、申し訳無さそうに
言いだしやした。

「こんな事になる前は一人とも仲睦まじく暮らしておつたんですが、
藤作があのような事態になつてからは喧嘩が絶えないようで」
二人とも気が強く、頑固なところがあつたのでやしそう。何事も
無ければ仲睦まじい夫婦でも一度火が付けば一気に燃え上がるよう
でやす。

決して夫婦仲が悪くなつた訳では無いのでやすが、一度燃え広が
った大火が辺りを焼き尽くさないと消えないように、一人とも何か
を焼き尽くさないと退く事は出来ないのでやしそう。

多少水を掛けても文字通り焼け石に水、まったく効果は出ないよ
うでやす。

だから地主殿は巫女を連れて家に戻つたのやすよ。
そんな事態に地主殿も多少疲れたのでやしそう。巫女にそれだけ
話しやすく顔に疲れが出やした。

「どうやら一刻も早く憑き物を落とさないとけませんね。」このま
までは憑き物が広まつてしまふようです」

恐ろしい事を言い出した巫女に地主殿はギョとした顔をしやした。
まさか自分まで悪夢を見だすのではないかと思つたのでやしそう。
ですが巫女は別な事をいだしやした。

「憑き物というのは姿を変えて広まつていく物です。根源は一つの
姿でも、人によつては姿をえて様々なるとなつて現れる物です」
まるで流行り病のように思えやすが違うのやすよ。この憑き物と
いつのは誰かしこにも広まる物ではございやせん。

広まるのは根源と縁がある人物のみでやして、根源を心配する氣
持ちが憑き物を広めてしやいやす。

ですが、心配するなどいのも無理な話でやして、この場合は根源をなんとかして憑き物を憑かないようにするしか「ござい」やせん。要は心配しすぎるなって事でやすが、地主殿にとつては可愛い一人娘。その夫婦が直面している問題でやすから、どうしても心配で疲れが溜まつてたようでやす。

そんな地主殿を巫女は心配しやしたのでやしじう。「こんな事を言い出したんでやすよ。

「そもそも憑き物と言うのは人が広める物でござります。迷い、不安、疑念と言つた物が憑き物を広めてしまします。ですから、心を強くお持ち下さい。そうすれば憑き物に憑かれる心配はございません」

人様の事、それが身内になると口を出したくなるのが人の性分でございやす。けれども、それが返つて憑き物を広めたり酷くる物でございやす。

ですから巫女は地主殿に堪えるように説いたのでございやしじう。ただ黙つて見ていろと言うのは忍耐がいることでございやすして、巫女は地主殿にそれを求めやした。地主殿も最初は異論があつたようではしたが、巫女に説き伏せられると納得の顔をしやした。

「それでは、私は今後一切口出しをいたしません。ですから巫女殿。なにとぞよろしくお頼み申します」

深々と頭を下げる地主殿でやすが、巫女からは不安な答えが帰つてきたのでやした。

「出来る限りのことはやらせていただきます。ですが……先程申したとおり。これはその人が秘め事を打ち明けないと、どうにもならない事なのです」

要は藤作の秘密を暴露しないと解決できない事だと巫女は念を押しあす。

人の秘密を暴くつて事はあまり気持ちの良いものではございやすせん。世の中には知らない方が幸せという事も結構あるもんでございやす。

それでも隠された真実があると知ると暴きたくなるのも人の性分。地主殿も藤作の秘密を暴くのに一役買つと言い出したので「ござこやす。

「もう一人の事に口出しはしませんが、それぐらいはやらせてもらいます。家の者を使い藤作の事を調べさせましょ」

「そうですね。時間はあまり無いようですから、形振り構つてはいられないでしょ」

藤作のやつれ具合から、このまま放つて置けば命に関わつてくるのは明白でございやす。一刻も早く藤作の秘密を暴く必要がござこやした。

話がまとまり巫女が一服しておりやすと、お琴と話した事を思い出しあして地主殿に尋ねやした。

「そういうえば、婧殿は毎晩『キヌ』といつ言葉にお心当たりはございませんか。おそらく人の名前だと思うのですけど」

「キヌ…………ですか？…………さあ、私には何のことやらせつぱりです。何故、人の名前だと思われたのですが？」

それは藤作が毎晩口にする言葉でござこやす。当然地主殿もその事を知つてやしたのでやすが、人の名前とは思わなかつたようございやす。

「婧殿はその言葉と謝罪の言葉を口にしてゐるようです。まさか物に謝るとは思いません。なら考えられるのは一つ。婧殿はキヌ、女人の人でしうね。その方に毎晩謝つてゐるのござこります」

「……なるほど」

確かにそう考えれば悪夢の意味が通りやす。

巫女の言葉どおりでしたら、男と女の仲でやすから何があつても不思議はござれいやせん。まさしく化けて出た、そんなところでございやしそう。

ですが地主殿はそんな巫女の言葉を裏切りやす。

「ですが、この村にはキヌなんて女はいませんが」

「この村にいなくても近隣の村や旅の人かも知れませんね」

確かに行き摺りの可能性も「いやこやす。」これなら誰に知られる」と無く事情に及ぶ事も「いやこやしゅう。」

藤作も男、そのような事があっても不思議や「いやこやせん。」それに地主殿にもそうした体験が「いやこやしたのでしょ」。数度頷いて納得したよう「いやこやす。」

「確かにその可能性はありましょうが、行き摺りの相手をどうやって調べれば……？」

村の者ならともかく余所者についてはあまり調べようが無いの「いやこやしゅう。」地主殿はどうか思案してこのよう「いやこやした。」

「婿殿に憑いてるのなら、その方はもう生きてはこないでしょ。」この付近で身元が分らない亡骸が見つかっているのなら、その方がキヌさんでしゅう。」

「なるほど」

死んでも許せぬ相手。それが藤作だったのやしゅう。

藤作が何をやったのかは分りやせんが、相当の恨みを買つたかもしだやせん。そして藤作はその事を隠していふ。

そう推測してみたのでやすが、ここでいくら話しあつても机上の空論と申しやして、決して答えが出るものでは「いやこやせん。」

巫女はその後も地主殿の推測を聞いた後に早めに休む事にしました。このまま話しあつてもしかたないと思ったのやしゅう。あらかたの事情だけ把握して行動は明日からにしたようですか。

翌朝で「いやこやす。」地主殿は田が覚めると真っ先に家の者に巫女を起し「どうに言こいやしたが、すでに巫女は朝食を済ませて出かけたよつでやした。」

「なに? どこに行つたところのだ?」

「村を見て周るとだけしか」

家の者にはそれだけ言つて出かけたよつでやした。

地主殿としては巫女をせつづき藤作の家に向かわせたかったのでやしそう。昨日自分は口出ししないと約束しやしたから、その分巫女を動かそうとしたかったのでやしそう。

けれども感じの巫女が居やしません。しかたなく地主殿は朝飯を済ませやすと、あつちへウロウロ、ひつちへウロウロとまつたく落ち着きやせん。

それもしかたない事で「じやこ」やしそう。なにしろ巫女は藤作の憑き物を落とすためにやつて来たのであって、村を見て周るためにやつて來たのでは「じやこ」やせんから。

「そんなものは後にすればいいものを」

地主殿はそう愚痴を言いながら家の中を苦い顔でうひつきやした。そして肝心な巫女が帰つてきたのは、日も真上に上がつた昼時で「じやこ」やす。

「どに行つてたのですか！」

地主殿は巫女が帰つてきた事を聞くと真つ先に巫女の元へと行つて怒鳴り込みやしたが、当の巫女はのんきに昼食をつまみながら答えやした。

「家の方に村を見て周ると告げたのですが、聞いておりませんか？」

「いや、そ、それはそうですが」

あまりにもあつけらかんと答える巫女に地主殿は怒る氣を抜かれて座り込みやした。

まったく、何を考えているのだと地主殿は巫女の顔を見やすが、本人はそんな地主殿を気にする事無く昼食を続けていやす。

しばらくはそんな巫女の顔を見続けていた地主殿でやすが、痺れを切らしたのでやしそう。膝を叩きやすと大きな声で巫女に向かつて口を開きやす。

「巫女殿」

「じやこ今までいた」

……なんとも、まあ、間が悪い事で、地主殿は言葉を続ける時を失つてしまいやした。しかたなく黙り込む地主殿。その横で巫女は

茶をすすつておりやす。

そして巫女が湯飲みを置きやすと地主殿に向かつて話しかけやした。

「ところで、この近くには夜路沼よみちぬまとこの沼があるやうですね？」

「ええ、『いやい』ますけど」

夜路沼というのは村の近くにある沼で、そこへして、沼まで道がしっかりとあるので夜だと路と間違えて踏み込んでしまう事から夜路沼という名前が付けられたんやすよ。

でやすが、この夜路沼。ただの沼という訳では、『いやせん』。お察しの方は気付いてるかもしだやせんが、そう、この夜路沼……底なし沼で、『いやい』やす。

一度足を捕らわれて沈み始めれば底まで引っ張り込まれるんでやすよ。

ですから、村の人は夜路沼には絶対に近づきやせん。それにこの沼があるからこそ、別の街道が作られたぐらいでやすから、相当沈んだ人がいるんでやしちゃうが、誰一人として発見されていないんやすよ。

さて、地主殿は夜路沼の事を一通り巫女に話しゃした。

「それで、夜路沼になにか？」

巫女から聞いてきた事でやすから、何かしらの意味があるのでやしちょうと地主殿は思つたようでやす。

「いえ、何かを隠すには適している場所だと思いまして」

「……ッ！」

それは藤作の秘密と関係あるのではないかと巫女は言いたいのいやしそう。少なくとも地主殿はそう思つたよつでやすな。

ですが地主殿は、その巫女の考え方否定しだしやす。

「いや、それは無いですよ。あの沼は村の者は誰一人として近づきません。なにしろ私が村の者達にそう命を出しているし、近づいた者は厳しく罰しておりますから」

つまり夜路沼の被害を出さないために行つた政で、『いやこやす。

村の者達も夜路沼の怖さは充分に分つてやすから、当然地主殿の命を破つて夜路沼に近づく者はいやしやせん。

「……そうですか」

けれども巫女は納得できなこりでやした。

「ああ、そんな事はどうでもいいでしょ。れつれつ、早く藤作の家に行つてください」

話が終わつた所で地主殿は巫女をせつつきやす。けれども、巫女は意外な事を言いだしやした。

「それでは……一緒に参りましょうか」

「えつ？」

昨日は口出しをするなど言つておきながら、今日は一緒に来いと言つたのでやす。一晩で言つてる事が逆転しやしたのでやすから、地主殿も困惑してしやいやした。

そんな地主殿に巫女は微笑を向けながら言つやす。

「私としましてはあなた様に勝手な事をして欲しくないのです。ですから昨晩は釘を刺させてもらいました。けれども、これから之事はあなた様も見ていたほうが良いでしょ」

「ど、といふ事は、私は口出ししなければ一緒に行つても構わない」と

「はい、ぜひ一緒に参りましょ」

てつくり蚊帳の外に追い出されると地主殿は思つておりやしたが、そうではなく勝手な事をしなければ一緒に行つても構わないということです。

地主殿は慌てて仕度すると言つて出て行きやす。静かになつた部屋で巫女は静かにお茶をすすります。

藤作は思いつきり不機嫌な顔で巫女を睨みつけてやす。その隣でお琴はオロオロとして落ち着きが無く、地主殿はブスッとした顔でただ座つております。

そんな中で巫女から話しが始めやした。

「それでは、あなた様が行つて いる秘迷始めについては、」理解いた
だけたでしょ うか

ですが藤作は巫女から顔をそむけやう。さういぢやうがおもふてゐる坂はないのでやしょう。

お琴が藤作の脇腹を突つ突き文句を一言だけ言つた後で藤作はよ
うやく答えやした。

「ああ、お琴から聞いた」

ふつきら棒に答える藤作に巫女は怒る事無く、數度顔をやすと話題に進む。

「でしたが、このままではあなた様の命も危ない事も」理解してお

りますね」

「分りました。そこで、私があな様の秘密をお聞きしましょう。

どちらか 話はもう話さない事を誓います ですから 私はただ話していいござくーんが出来ないでしょ？

「だから秘密なんて無い！」

ここまで言われても藤作の主張は変わりやしません。命が危ない

とまで言はれておりない秘密なのでございやし？」
その後も巫女は説得を繰りやすが、藤作は秘密はヨリ黒ニヨリの一点

張り。話は平行線のまま夕暮れになつてしまひました。

「…………どうしても、あなた様に秘密は無いことおっしゃるのですね」

巫女まつ

巫女は少しの間だけ目をつぶると何かを考える仕草をしやす。口に手を当てながら考え込む巫女の姿は絵になるほどの物でございやですが、ここに居る者は誰一人として、そこまで気が回りやせんでしょ。

そして巫女が瞳を開きやすと最後の説得に掛かりやす。

「IJのままでは田那様の命は危ないので。それでも秘密は無いと

おっしゃるのですね

「ああ、そうだ」

最後まで不機嫌に答える藤作にお琴は溜息を付きやして、地主殿は大きく息を吐きやした。

ここまで強情なのも困ったものでござりやしょ。なにしろ命が危ないとまで言われても蝶らないのでやすから。

話し合ひを続けて半日。とうとう壁へなつてきた時に巫女がこんな事を言い出しあした。

「分りました。それではしかたありませんね。お琴さん、今日はせこちらに泊めさせてもらいますね」

「きなりの申し出にお琴は驚き狼狽してしやいやす。

「今晚はここに罠を仕掛けさせでもらいます。そして旦那様を苦しめている憑き物が来たら……戦つて落とします。下手をすればかなり暴れる事になってしまいますが、よろしいでしょうか？」

ここに戦のよくな戦いをしようといつていつのやすから、相当派手なものになるでやしょ。下手をしたら家が壊れるかもしれやせん。

それでも藤作の憑き物が落ちるのならとお琴はすぐに良いと答えやした。藤作は反対しやしたが、地主殿も今晚は泊まると言つ出して、最後には根負けして折れやした。

義父である地主殿に強く出られては藤作も言つ返せないのでやしょ。

こうして巫女と地主殿は藤作の家で夕食を喰らい、空いている部屋に入ったのでやすが、寝床は用意しやせん。

なにしろこれから一戦やるのと聞つのでやすから、今晚は寝られないのでやしょ。

それでも巫女は一旦家の外に出やすと、すぐに戻つて仮眠を取るといつて部屋に引つ込んでしやこやした。

一方の地主殿は一晩中起きてゐつもりでやして、畳の上に座りながら落ち着かない様子でやした。

そんな地主殿の元にお琴がやつてきやす。

「おっ、ヒツ」

「お琴……眠れないのかい？」

お琴は頷きやす。どうやらそれで地主殿の元へ来たようだやす。
お琴は地主殿の隣に座りやすとお茶を入れて地主殿の前に差し出
しやす。

「大丈夫かしら？」

なにがと地主殿は聞き返すとしゃしたがやめやした。いくら心
配しても心配事は呪きなじでやしうつ、自分達に出来る事はあま
りにも少ないからでやす。

出来る事といえば祈る事ぐらいでやしよ。

それに地主殿は昨日の約束が「わこやす。」口を出せ
ずに安心させてやるのが一番だと思いやした。

「ああ、藤作は巫女殿が助けてくれる。その後はお前が藤作を支え
てやらねばいかんのだ。だからこれぐらい耐えられんぞ！」
心を強く持て」

「…………うん」

少し涙ぐみながりお琴は頷きやす。その後も地主殿はお琴を勇氣
付けさせ、お琴も少し泣きながら何度も頷きやす。

美しい親子愛でござりやす。お琴は父親の愛情を充分過ぎぬほど
感じながら夜は更に深けて行くのでやす。

「来ました」

気配無く、突然開いた障子の向いに巫女が険しい顔をしながら
中に居るお琴と地主殿に告げやす。

こきなり現れた巫女にお琴は思わず声を出しそうなぐらに驚きや
して、地主殿も目を大きく見開いてやす。

どうやら一人とも大いに驚いたようですが、巫女はそんな一人
に問い掛けやす。

「これから憑き者と対峙します。一緒に来られますか？」

とんでもない事を巫女は言いだしやした。

先程は戦並みの戦いになると書いたばかりの場所に一緒に来るかと聞いたのでやす。当然行けば命が危ういでやしそう。

それでもお琴は藤作の傍に居たいのでやしそう。巫女の言つている事を理解するとすぐに行くと返事をしやした。

地主殿もお琴に遅れて行くと答えやす。巫女は領きやすと袂から札を一枚取り出しやした。

「これを肌身離さずにお持ちください。札の靈力が続く限り身を守つてくれます」

地主殿とお琴は札を受け取り、強く握り締めやすと領きやした。それを承諾と受け取つた巫女は足早に移動を開始しやす。目的地は当然、藤作の休んでいる部屋でございやす。

地主殿とお琴も急いで巫女の後を追いやした。なにしろ狭い家で「ございやすから、一人が巫女に追い付いた時には到着してたのでございやすよ。

巫女は障子に手を掛けやすと一人に顔を向けて、キッと鋭い視線を向けやす。開けるから準備は良いかという意味でやしそう。

でやすが、地主殿とお琴はすぐに返事を返せやせん。なにしろ障子の向こうには恐ろしい憑き者がいるのでやすから、誰しも怖氣付くものでやすよ。

それでもお琴は勇気を振り絞り、首を縦に振りやすと地主殿も覚悟を決めたようで領きやした。

巫女も一度頷きやすと障子に視線を戻して、一気に開きやした。何か出てくる。と地主殿とお琴は思ったことでございやす。

ですか、その向こうにはいつもの光景があるだけでやした。

そのいつもの光景でございやすが、藤作が寝ており、うなされているだけでやして、他に異常な光景はございやせん。

最初は強張つた顔をしていた地主殿とお琴でやすが、何も居ない事に巫女が勘違いをしたと思いやして、安心したのでやしそう。全身に入っていた力が一気に抜けてしやいやした。

そして地主殿が巫女に勘違いではないのか、と問い合わせようとした時でやす。突然巫女が札を取り出して早口で呪を繋ぎやす。

「恐み恐み白さく掛けまくも畏き大直日神、清き川の流れは清浄の力、眼前の瘴氣を打ち払う事を願わん、日夜の勤めをお認めならば我が願いをお聞き届け、穢れを払う力を！」

札が部屋の中へと投げ込まれやす。札は一直線に部屋の真ん中へと飛んで行きやして、まるで何かに張り付いたかのように部屋の中央に浮かび上がりやす。

更に札が光り輝きやすと、今まで何もなかつた部屋から紫色の煙が一気に噴出しあした。

突然吹き出した煙に地主殿とお琴は混乱したようで、奇声を上げながら煙を吸わないように口と鼻を塞ぎやしたが、巫女はその中でも特に何もせずに部屋の中を睨みつけてやす。

「……あれが、憑き者の正体です」

煙が晴れやすと今まで何も居なかつた部屋、しかも藤作が寝ている真上に鬼女^{きじょ}が現れやした。

鬼女はとても人間の顔なんにしておりやせん。額からは一本の角を生やしておりやして、顔は深いしわが縦横無尽に走りやして、目は赤く光、口からは大きなキバが垂れ下がつておりやす。

正真正銘の鬼がそこにいやしたのでおりやす。

そんな鬼女が突然現れたのでやすから、地主殿とお琴は悲鳴を上げて腰を抜かしやしたが、巫女は札を取り出しあして呪を繋ぎやす。

「恐み恐み白さく掛けまくも畏き天之尾羽張神^{あめのおほばりのかみ}、火神の首を落としき十握剣、不淨を祓う力を求めん、日夜の勤めをお認めならば我が家願いをお聞き届け、不淨を斬り裂く力を！」

呪を繋ぎ終えやすと札が光り輝きやして十握剣へと変化しやした。

十握剣といいやすのは、左右に五本ずつ枝分かれしたような小さな刃が付いておりやして、かの火之迦具土神の殺した剣でございやす。

その十握剣を握り締めやすと巫女は鬼女に向かつて話しかけやす。

た。

「その方にどうのような恨みがあるかは知りませんが、例えその方を殺したとしてもあなたには何も残りません。話によつては力になりますから、そこからお退きなさい！」

藤作が口を開かないなら、じつうに聞いてみようといつ事でやしよつ。

確かに藤作を恨んでいる本人でやすから原因を知らない事は“ございやせんし、こうじつた憑き者は自分から恨みの原因を話したがる物でございやす。

誰しも心の内に溜めている物は話して発散したいのでやしう。けれども鬼女は巫女を見て笑いやすと意外な事を言いだしやす。「かかかっ、残らない事は無い。この人は、私が連れて行くのだから。この人はずっと私の傍に居る」

鬼女の声は女に、いや、人間には決して出すことの出来ない野太く重い声で鬼女は言いきりやした。

「連れて行く？ 執着ですか」

女の執念と申しましやしあうか。どうやらこの鬼女は藤作を自分の元へずっと置いておきたいようでやす。

かといって、はいどうぞとも言えやしやせん。そうなれば力づくで鬼女をどうにかしないといけやせん。

ですが、その前に、鬼女が藤作を狙う理由を聞きださないといけやせんですよ。

「あなたがそこまでして、その方を想うのは何故ですか？」

「……」

鬼女はすぐには答えやせんでした。良く見れば分かりやすが、少し顔を俯けて表情が暗くなつておりやす。

後ろにいるお琴と地主殿は気付きもしやせんでしたが、巫女はしつかりと気付いたようでやす。

「……その方は、毎晩あなたに謝つていいのでしょうか。その誠意は悪夢を見せているあなたには良く分かるはずです。ですから……許

してあげられないのですか？」

姿形は鬼に変わりやしたが、その想いがある限り人間の心を持っているものでやす。ですから巫女の言葉は鬼女の心を揺るがしたようでやす。

「もう少しの誠意が欲しいというのなら私からその方にしつかりと謝らせます。ですから、許してあげてください」

夜の静寂が戻りやして物音一つしやせん。鬼女に巫女の言葉が届いたのでやしき。巫女を見詰めながら静かに口を開きやした。

「……出来ぬな」

おやつ、どうやら巫女の説得は失敗したようでやす。それびくらか鬼女を激昂させてしやいやした。

「貴様は知らぬのだ！ こやは私は裏切つた。それびくらか私を殺したのだ！ そんな奴を許せるわけが無い！」

裏切るだけでも相当の恨みを買つと言いやすのに、そのうえ殺されもしたら誰だつて恨み、魂をこの世に留めて復讐したいと思いやしそう。

この鬼女はまさに復讐の鬼になつたようでありやす。

「けれども連れて行くといふ事は未だにその方を想つてゐるのでしょ？」

鬼女は藤作を連れて行くと言いやした。とこひつ事は藤作を殺すつもりはないのでやしき。

鬼女が願つてゐる事は藤作と暮らす事かもしれやせん。

けれども所詮は生者と死者。どんなに望もうとも共に生きて行けはしやせんのです。どのような力も生と死の理を覆す事は出来やせん。

それでも鬼女の想いは理を分らなくするぐらうに強いのでやしき。

一途過ぎる想いはいろいろな事を隠してしまうようでやす。

「ああ、その通りだ。例えどのような事をされても一度好いた相手をそうそう恨みきれるものではない。だから連れて行くと決めた」

「そんな事が出来ると思つてゐるのですか？」

「つるやこ！ どのよろくな事も関係ない。邪魔をするところならお前を始末してやる！」

最早、話をする気は無いのでやしづ。鬼女はふわっと宙に浮きやすと巫女に向かつて飛んできやす。

咄嗟に十握剣で鬼女を受け止めやすが、よほど威力があつたのでやしづ。巫女は鬼女と共に部屋の外へと押し出され、更に隣の部屋へと投げ込まれやした。

障子を突き破り部屋に転がる巫女。それでもすぐに立ち上がりやすとお琴と地主殿に向かつて叫びやす。

「藤作さんの傍でじつとして、札がある限り守つてくれます！」「

札の守護がある限りお琴と地主殿は守られやす。その一人が藤作の傍にいれば藤作も守る事が出来るといつものでやす。

巫女の言葉にお琴は真っ先に藤作の傍へと駆け寄りやす。地主殿も抜けた腰を引きずりながら、なんとか到着して藤作の上に倒れこみやす。

その藤作はと云ひやすく、鬼女に何かされているのでやしづ。これだけの騒ぎなのにまったく起きやせん。こつものよつてひてひつたひなされていやす。

そんな地主殿達を確認する間もなく、巫女は鬼女の攻撃を防ぎ続けやす。

鬼女の手は長い爪に鉄のように硬く。とてもではじめにやせんが切れた物ではありやせん。普通の刀なら折れてしまいやしたでしょうが、十握剣は巫女が神の力で手にした剣でやすから、斬るのは難しくとも決して折れやせん。

まあ、折れやせんが、斬れなくては勝つ事が出来やせん。打つ手無しのように思えやすが巫女には考えがあるのでじめにやしづ。今は鬼女の攻撃を防ぎ続けやす。

けれども鬼女の攻撃は苛烈を極めやす。襖を切り裂き、畳を弾き、壁に大穴を空けもしやした。さすがは鬼の力というものでやしづ。一撃でも喰らえばとてもじやありやせんが生きてはい不得やしづ。

う。

そんな攻撃を巫女は防ぎ続けやす。受け止めた衝撃で着物が切り裂ける事も「じやこ」やしたが、一滴の血も流してやおつやせん。

なんとも凄まじい戦いになつてきやした。場所も部屋だけに留まらず、飯場に居間、更には玄関から縁側までと家の隅から隅まで戦場となつておりやす。

鬼女の奇声と轟音が聞こえる中で地主殿とお琴は、早く終わる事を祈りながら縮こまつてゐしか「じやこ」やせん。

夢であつて欲しいと思つたことでやしきう。ですが、そんな時に戦いの音が突如としやして静まつたので「じやこ」やす。

「……ど、どうした事だい？」

先程までの雄雄しい音が消え去つたのでありやす。地主殿はやつと身を起こしやすと辺りを見回しやす。

こきなり静かになつた事で動いて良いのか迷つてこるのでやしきう。

そんな折にいきなり地面が光りだしやした。

どうやら何かの形を示しているのやしきうが、地主殿にはそれが何のかはわかりやしやせん。なにじみ家を囲むように光つておりやすから。

そして聞こえてきたのは、あのおぞましい叫び声であります。

「おのれ謀つたな！」

どうやら巫女の策略が上手く行つたようでありやす。巫女は悔しそうな声で巫女に囁み付きやすが、巫女の声は「こからでは良く聞こえやしやせん。

地主殿は見に行こうと立ち上がりやすが、地面の光が急に強くなりやすと鬼女の悲鳴が響きやした。

されども、鬼女も抵抗しているのでやしきう。地震が起きて大きく揺れやす。

地主殿は立つていることが出来ず、再び座り込みやすと揺れはドンドンと大きくなつてこくにつれて地面の光も強くなつていきやす。

「おのれ

つー

鬼女の断末魔で「じぞーいやしょー」。一際響き渡る声がしやすと地震と光は治まつていき、元の夜が訪れやす。

再び訪れた静寂でやすが、地主殿は動いて良いものか迷い、お琴と顔を見合させやす。

静かな足音が聞こえやすと二人ともギョとした顔でそちらに向かやすが、すぐに安心した顔になりやした。
そこには巫女の姿があつたからやす。

「倒して……くださったのですか？」

あの鬼女が倒されたなら万事解決で「じぞーやすが、巫女は顔を横に振りやす。

「残念ながら追い払つただけです。あの鬼を倒すにはあなた様の秘密が必要なのでござります。それが出来ないうちは追い払うだけが精一杯です」

「そう、ですか」

がつくりとお琴は肩を落とし地主殿が支えやすが、進展が無かつたわけではござりやせん。

「ですが鬼の事情は分りました。この事を曰那様に話して全てを打ち明けてもらいましょう。そうすれば鬼を冥府へ送ることが出来ます」

そう、全ては藤作に掛かつてゐるのでおりやす。何としても藤作の秘密を暴かなくてはなりやせん。

けど今日はもう遅いでやす。全ては明日にして今はボロボロになつた家で休むことにしやした。

さすがに昨晩の事を聞かされやすと藤作は愕然としやした。なしろ家がボロボロになるという証拠つきでやすから信じない訳には行かないでやしょー。

「……おキヌさんの事を……話していただけますね」

「ひなつてしゃつてはもう話すしかないでやしょ。」藤作は俯きながら、はいと返事を返すと語り始めやした。

藤作の話はこうでやす。

おキヌという女は村境に住んでいた女で「じぞいやしてね。」どうも幼い頃から互いに想つておりやして夫婦の約束までしてやした。互いに一親を早くに亡くした事もあつたのでございやしょ。かなり前から親しかつたようでやすが、おキヌが村境に住んでいやした事から、こちらの村では藤作に、あちらの村ではおキヌに想い人がいる事は知れていしたが、それが誰かは知れていなかつたようですが。

まあ、夫婦になれば自然と知れ渡る事と藤作もおキヌもまつたく気にしなかつたのでありやすが、困つた事になつたのであります。それがお琴でございやした。

藤作に惚れていたお琴の気持ちを知つた地主殿が嫁に貰つて欲しいと言つて來たのであります。

最初は藤作も断つたのでやすが、なにしろ相手は地主の娘。むげにも出来やせん。

そしてその話がおキヌの耳にも入つたのでありやしょ。おキヌは身を引いて行方をくらましたのでございやす。

そりやあ藤作は必死で探しやした。だけど、どんなに探しても見つかりやあしやせん。月日が流れていくうちに藤作はおキヌは戻つてこないだろうと、そして自分の為に身を引いてくれたのだろうと思つようになりやした。

そして藤作はお琴と夫婦になつた訳であります。

それがまさか鬼になつて戻つてくるとは思いも寄らない事でございやす。忘れられなかつたのでございやしょ、あれだけ藤作の事を好いていたんでやすから。

けれども、どうも鬼女の話を食い違つ点がございやす。

「おキヌさんは……あなたに殺されたと言つてました。その事をお聞かせくださいませんか」

あの鬼女は藤作に殺されやしても憎みきれずに現れたので「じぞこ
やす。惚れた弱みというもので」「じぞこやす。

されど、殺された事は確かで」「じぞこやす。おキヌの、そして藤作
の為にもそこだけは、はつきりとわせとかないといけないのでやす
が、藤作は反論しやした。

「そんな事は知らない！ 私は……必死におキヌを探したんだ。そ
れが、なんで殺さないといけないんだ……」

段々と声が小さくなる藤作に嘘は無いように思えやしそう。

仮にも夫婦を誓つた仲でやすから、そのような事は無いように思
えやしそうが、相手は地主の娘でやす。おキヌとお琴を天秤に掛け
やして、おキヌが邪魔になつたとも考えられやす。

地主殿はそうではないかと問い合わせやすが、藤作はそんな事は無
いと断固として認めやしやせん。

そうなると鬼女の思い込みや間違いという事もありやすが、殺さ
れた相手を間違つほど間抜けでは」「じぞこやすんでしょ」。

食い違つ話に地主殿とお琴は混乱しやしたが、巫女は静かに藤作
に向かつて問い合わせやした。

「ならばお聞かせ下さい。旦那様は、おキヌさんの事をどう想つて
らつしやるのですか？」

なんとも難しい問い合わせで」「じぞこやす。

かつては互いに惚れあつた仲で」「じぞこやす。それが不運な事に自
分達の意思に関係無く離れ離れに。もし元に戻れるのなら戻りたい
のでやしょ」。

けれども、今の藤作にはお琴という立派な妻がいやす。お琴がい
たからこそ、藤作はおキヌの事を忘れて一人で頑張つてこれたので
ございやす。

そんなお琴を裏切る事は絶対に出来やしやせん。

藤作は悪夢を見ている間はそんな葛藤と戦つてきたので」「じぞこや
しょ」。

おキヌへの情とお琴への情。どちらも大切で」「じぞこやす。それで

もどちらか一方を取らないといけないのでやすから、なんとも苦しい事でござこやす。

藤作は少しの間だけ俯いて黙り込みやした。そして顔を上げやると巫女の瞳を真つ直ぐに見据えやす。

「もし、おキヌの言ひとおりなら何と謝つても許される物では無いでしょう。けれども、今私にはお琴が居ます。夫婦の誓いを立てたお琴を裏切る事は出来ない。だから……巫女様、どうかおキヌを安らかな眠りに付かせてあげてください」

藤作は巫女に向かつて頭を深く下げやす。

それが藤作に出来る精一杯の事でやしきう。自分でおキヌを成仏させる物ならやつてやりたい。けれども藤作にそのような力はございません。だから巫女を頼るしかないのです。

そんな藤作に巫女は厳しい言葉を掛けやす。

「それは……ご自分が楽になりたいからですか？」

おキヌが成仏すれば悪夢も見なくなりやす。それどころか自分の過去を忘れるには一度良い事でござこやす。

そう言われれば、なんとも自分勝手と思われやすが、藤作は巫女の言葉に真つ向から否定しやした。

「違います！ 本来なら私がおキヌを救つてやらないといけないのでしょう。けれども私にはそのような力はござこません。一緒に行つてやつても良いのですが、お琴を悲しませる事も出来ません。勝手な言い分なのは分つてます。けど！ 私には巫女様に頼る以外にどうする事も出来ないので此」

下げた頭の向こうで藤作は涙を流しやす。

悲しい事でござこやすが、そつする以外にどうする事も出来ないのでやしきう。

藤作にとつておキヌの事は、惚れあつた仲だとしやしても過去の事でござこやす。忘れる事はできやせんが、今の生活を壊す事も出来やしやせん。

哀れでやすが、ここはおキヌを退治するしか、おキヌを救つてや

る方法は無いので「ございやす。

咽び泣く藤作に巫女は安心した顔で頷きやすと頭を上げさせやす。

そして懐から取り出したのは三枚の札でやす。

それを藤作、お琴、地主殿とそれぞれ一枚ずつ差し出しやすした。
「委細承知しました。あなた様に嘘が無ければ、その札で全てが解決いたします。けれども一つだけ問題がございまして。その札をおキヌさんの遺体に貼り付けないといけません」
つまりおキヌの亡骸が無いとどうにもならないという事でございやす。

そこで巫女はそれに札を渡しやすて、おキヌの亡骸を捜すよううに言いやした。

なにしろ狭い村とは言いやしても、歩いてみればかなりの広さでございやすし。山の中にでも在らつものなら探すのに苦労しやす。けれども、それさえ出来れば全てが解決しやすから、三人は頷きやして承諾しやすした。そこで手分けしておキヌの亡骸を捜すという事になりやすした。

すぐに出発する巫女を含めて四人は散り散りに村の周辺をおキヌの遺体を求めて探し回りやすした。

田が暮れやすと一度藤作の家に戻った巫女達はそれぞれの話を聞きやすが、遺体なんてそう簡単に見つけられるものではございやせん。

しかたなく探索は明日にしやすて、その田は巫女が藤作の家に強力な結界を張りやすと、地主殿と巫女は引き上げやすした。
なにしろ村中を歩き回つたのでやすから皆が疲れきつていたのでやしう。藤作とお琴はすぐに眠りに付きやすした。

そして深夜でございやす。とある夜道を提灯を持ちながら歩く人

影が「ござこやした。

なにしろ真っ暗で「ござこやすからね。顔はよく見えないので」「ござこやす」が、迷う事無く山の中を歩いていきやす。どつやら村の人でやしき。

けれども、これから先は村の辻で入ってはいけない場所で「ござこやす。そこに迷わず入つていくたあ、よほどの事があるので」「ござこやす」。

更に歩き続ける人影で「ござこやすが、道の途中で急に立ち止まりやす。

辺りはうつそうとした草木が「ござこやして、とても歩きずらい場所で」「ござこやすが、まだまだ先に行けそうに見えやすが……実は行けないのでやすの。

夜だと道に見間違う場所で「ござこやすが、実は道ではなく沼でござこやす。

そう、お客さん。分つたように得意げな顔をしてやすね。そこのお客さんの「想像どおり、ここは夜路沼で」「ござこやす。

人影は提灯を片手に沼をよつゝ見回しやす。まるで何かを探しているようすで「ござこやす。

「お待ちしてました」

突然声を掛けられて人影はギョとしやして、声の方に提灯を向けす。

照らされた木々の向こうから姿を現しやしたのは、眠りに付いているはずの巫女で「ござこやした。

「な、なぜ？」

人影は相当混乱しているようでありやして、いかにも歩いてくる巫女とは反対に後ずせりやす。

「そうですね……申し訳ないのですが、ペテンに掛けさせてもらいました。あんた様を……ここに来させるために」

つまり人影は騙されたわけで「ござこやす。その事に気付いた人影は提灯を落としやして燃え上がり、辺りを明るくしやす。

その明かりに照らされた人影は……地主殿で「じぞこ」やした。

「ち、違つ、わ、私はここに、おキヌの遺体があるのではないかと、そう、そう思つてきただけだ」

地主殿はここに来た理由を説明しやすが、巫女は笑顔で返しやす。「ええ、ここに遺体があるのは最初から分つてゐるでしょつね。なしろ、あなた様が殺してここに捨てたのですから」

なんとも信じられない言葉が巫女の口から出たもので「じぞこ」やす。地主殿は言いがかりだと巫女に食つて掛かりやすが、巫女は笑顔のまま地主殿がおキヌを殺した現場を見ていたかのように語り始めやした。

「あなた様はお一人でここにおキヌさんを呼び出しました。このようなところを誰かに見られる訳にはいかないのでしょ。だから家の者を誰一人つける事無く、ここに来られました。おキヌさんには二人の祝言について話があると言つたのでしょ。なにしろ、一人が夫婦になればおキヌさんもこの村に住むことになるのですから」巫女は更に詳しい説明をしやす。その話は「じぞこ」やす。

地主殿は村の境にある夜路沼でおキヌと会い、一人の祝言について詳しく話し、日程などを決めやしたが、それは全ておキヌを油断させるためで「じぞこ」やす。

おキヌもまつたく疑わなかつたで「じぞこ」やしょ。まさか自分達を祝つてくれてゐる地主殿がそのような凶行に出るとは思つても寄らない事で「じぞこ」やす。

それから地主殿はおキヌの氣を逸らしやすと、袂に隠していた紐を取り出しやして後ろから首を絞めやした。

その時に「これもお琴のため」と言つたそでやす。そして冷たくなつたおキヌを沼に捨てやすと何食わぬ顔で村に戻つたそで「じぞこ」やす。

まるでその場に居たかのよつて語る巫女に地主殿はすぐ反論出来やせん。どうも図星のよつでやすが、地主殿は認めよつとじやせんでした。

「な、なぜ私はおキヌさんを殺さないと、いけないんだい？ 私が二人を祝つてたんだ」

顔から汗をかき、言葉もうまく出ないようだ。誰が見ても苦しい言い訳でやしょ。けれども地主殿はその言い訳を貫くつもりでやす。

巫女は溜息を付きやすと沼へと目を向けやす。

「では本人に語つてもらいましょうか？」

何を言つているのか分らない。地主殿はそのような感じで「じざい」やしたが、巫女が沼に向かつて一声掛けやすと、沼の水が一気に吹き上がり、飛び出してきた物が巫女の傍へと降り立ちやす。

「そ、そそ」

もう地主殿は言葉が出ないよつでやす。そりやあそудでやしょ。なにしろ昨日襲つてきた鬼女が巫女の隣に立つてゐるのでやすから。「ですから先程申しました。ペテンに掛けさせて頂いたと」

どうやら巫女と鬼女は最初から通じ合つていたようでありやす。昨日の戦いといい、毎晩の悪夢といい、なんとも手の込んだ芝居をしたもので「じざい」やす。

けれども地主殿はそのような事に気付かやしやせん。なにしろ昨日は見ているだけでも恐ろしかつた鬼女が目の前にいるのでやすから。

しかも巫女と仲間と知つては、どうする事も出来やしやせん。恐怖で身を振るわせるだけでやすから。

そんな地主殿に巫女は言葉を続けやす。

「あなた様は娘さんの恋を成就させるために恋敵を殺しました。親バカとは言いますが、あなた様のはやりすぎで「じざい」ます」

娘の恋路に親が出てきて、しかも横車の手伝いをしたつていうやすから、なんとも甘いといいやしょうか、迷惑な話でやす。

しかも恋敵を殺してやすから、もつ許せる物では「じざい」やせん。けれども鬼になりきれない人もいるので「じざい」やしょ。それがおキヌで「じざい」やす。

「けれども、おキヌさんはあなた様が許しを乞い、嘘偽り無く世間に知らせるなら許すと仰いました。自分が殺されながらも許すと言つたのです。……けれども、あなた様は最後まで秘め事を打ち明けようとはしませんでした。もう、許せる事ではなくつたのです」「そうでございやす。秘め事は藤作にあったのではございこやせん。

全て地主殿にあつたのでございやす。

けれども、地主殿は人を殺してるのでやすから、そう簡単に打ち明けるとは思えやせん。

そこで藤作に秘め事があるように見せかけて、地主殿に気付かせようとしたのでやすが、上手くは行かなかつたようです。

恐ろしい目に遭つたといふのに地主殿は秘め事を隠し続けやした。「そ、そんな、だ、第一、秘め事は藤作にある言つたではないか、藤作にも秘め事を打ち上げるよう説得を

この期に及んで地主殿は言い訳をしやすが、巫女ははつきりと言いい切りやす。

「私は藤作さんの事を旦那様、あなたの事をあなた様と言つて分けたおりました。お気づきになりませんでしたか?」

要するに藤作に話しかけていた事は全て地主殿に話していた事になります。

「そ、そんな」

地主殿は力が抜けてその場に座り込みやす。もう立つてゐる氣力すらありやしやせん。

巫女は地主殿の姿に溜息を付きやすと鬼女に向かつて言葉を掛けやす。

「さあ、もういいでしょ。おキヌさん、連れて行ってください」鬼女は頷きやすと地主殿元へ一直線に飛びやすと、地主殿の両肩を掴み持ち上げて沼の上まで飛んで行きやした。

「そうそつ、一つだけ教えてあげます。この沼の正しい名前は黄泉路沼じねまです。沼の底が冥府へと繋がつてゐる事からその名前が付きました。さあ、後はおキヌさんがあなた様を冥府へと案内してくれる

でしょ」「

巫女の言葉に地主殿は叫びやすが、その叫びは沼の底へと消えていったのであります。

翌日、巫女は藤作の家を尋ねやすと地主殿が命を掛けでおキヌの靈を成仏させた事を告げやした。

さすがに真実を話すのは酷という物でやしう。

泣き崩れるお琴を擦りながら藤作が一人の供養を約束しやすく、巫女は藤作の家を後にしやす。

その巫女が向かつたのは夜路沼で「ひれこ」やす。

さすがに毎間だと道には見えず、しつかりと沼に見えやす。その沼の淵で巫女は沼に向かつて呼び掛けやす。

「おキヌさん」

沼の上に丸い光が出来やすと、そこから一人の女が現れやすした。その姿は昨日までの鬼では「ひれこ」やせん。綺麗で儻げな女の姿でござこやす。

「どうも、ありがと」「ひざいました」

おキヌは巫女に向かつて深々と頭を下げやす。

「いいえ、私はあなたの依頼をこなしただけです。これであなたが冥府へと旅立てば、私のやるべきことは全て終わりです。……ところで」「ひ

どうやら巫女には気になる事があるようだ」「いややす。いや、腑に落ちない点で」「ひれこ」やしう。それをおキヌに尋ねやす。

「藤作さんの事はあれで良いのですか？ 今回の事は地主が全て悪いとは言え、未だに藤作さんに惚れているのでしう？」

復讐は果たしやした。けれども藤作への想いを断ち切つた訳では「ひれこ」やせん。そこに未練があつては冥府へ旅立てない、なんて事になるのではないかと心配したよつでやすが、それは要らぬ心配のようでした。

おキヌは少し悲しげで、それでもビックなく安心したような笑顔を巫女に向けやす。

「良いのです。あの人の幸せを……壊することは出来ない。それに、あの人はちゃんと私の事を想ってくれていた。それだけで、私は充分救われます」

「そう、ですか。……本当に仏のような人ですね」

「はい?」

最後の言葉が良く聞こえなかつたのでやしき。おキヌは聞き返しやすが、巫女は首を横に振りやす。

「なんでもござれません。どうか、良き旅を」

「はい」

おキヌはもう一度頭を下げやすと足元から消えていきやす。もつ未練は無いのでやしき。

それに藤作にはお琴がいやす、何も心配する事はござりいやせん。好いた人が幸せになるなら、それだけでおキヌは充分なのでござりやすから。

おキヌが旅立つて静かになつた沼で巫女は一人、天を仰ぎやす。「どうか、ずっと清らかなままで……私のようにはならないでください」

言葉の真意は巫女の内でござれやす。

さて、いかがでしたでやしき。ヒメ始めにまつわる悲しい話でございやしたが、出来ることならおキヌのように人に恨まない心を持ちたいものでございやす。

……えつ、結局は秘迷始めが話の由来かだつて?

いやー、お客さん、鋭いねー。実は秘迷始めがこの話のヒメ始めではございやせん。

「のヒメ始めとはでやすね。年が改まつてから、巫女のような役割を持つ者がでやすね。悲しい魂を冥府に送ることから『悲冥始め』

ところのが由来でやす。

仕事始めのように思えやすが、悲冥始めは遅ければ遅こぼじ、
無ければ無いほど良いと言われてやす。

なぜかって？ そりやあ、悲しい魂は無い方が良いでやしじ。

死ぬ時は晴れ晴れとした気持ちで死にたいものでやすね。

さて、お時間でございやすね。それではヒメ始め、これにて終わ

りでござれこやす。」静聴、ありがと「ござれこやした。

(後書き)

さてさて、お久しぶりの方はお久しぶりです。初めての方は初めてして～。

さてさて、今回のヒメ始めはいかかでしたでしょうか。……ふつ、何人がタイトルに惑わされたかな。……いや、わざとじゃないよ。

……まあ、期待した事は認めますが。

まあ、そんな訳で人中鬼門録と同じように、全て語り口調で通してみたのですが、いかがでしたでしょうか。

人中鬼門録では賛同の声が多くつた……と思つた。ので、今回も同じように全て語り口調にしてみました。うへん、まあ、悪くは無い……と思つて！！！

さてさて、そんな訳でこのシリーズは一作目になるわけですが……次があるかは分りません。というか、シリーズで書いていった方がいいのだろうか？ それ以前にこれ以上のネタをどこから出そつかと、いろいろと悩むかもしれない今日この頃を送っております。

まあ、そんな訳で、気が向いたら三作目を書きますね。

ではでは、ここまで読んでください、ありがとうございました。

そして、これからもよろしくお願ひします。

以上、運氣が向上してきた……かもしだれない葵夢幻でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2492g/>

逢魔奇譚 ヒメ始め

2010年10月8日15時42分発行